

東西宗教交流学会の歩みと今後について

氣多雅子

昨年に続くコロナ禍で例年通りの学術大会開催が困難になったことを機に、これまでの本学会の歩みを振り返り、今後の活動について協議する時間をもつことになった。その議論の資料として、これまでの本学会の活動をまとめ、そこから考えられる問題点をいくつか取り出してみたい。

本学会の設立の経緯と初期の活動

まず、南山宗教文化研究所HP内にある本学会のHP上の紹介文を挙げておこう。

「東西宗教交流学会は一九八〇年六月、ハワイ大学で開催された第一回 East-West Religions in Encounter 国際学会

に刺激され、土居真俊氏の発議によって設立されたものである。会員は総員六十二名ほどの小さな学会であり、発題者は東西宗教、とくに仏教側とキリスト教側との交流を学問的な概念化を通して遂行しようとする、きわめてユニークな学会である。東西宗教の学問的交流のため米国の Society for Buddhist-Christian Studies と協力関係にある。学術大会は、年一回（夏）で開催される。学会発表および討論は学会の学術雑誌『東西宗教研究』に刊行されている。」

東西宗教交流学会の第一回学術大会は一九八二年七月二六～二八日に京都の関西セミナーハウスで開催され、そこで本学会が発足となった。初代会長には土井真俊氏、幹事にはキリスト教側からヤン・ヴァン・ブラフト氏、本田

正昭氏、八木誠一氏、仏教側から石田慶和氏、坂東性純氏が就任した。現在では物故されたか、本学会の活動から退いておられる方々である。設立の経緯と趣旨については、八木誠一氏「東西宗教交流学会小史」〔『東西宗教研究』第六号〕に詳細に記録されている。

実は、これまでの歩みを振り返る試みは第二五回学術大会（二〇〇六年）でもなされている。「東西宗教交流学会の意義について」という大会テーマが掲げられ、大会記録は会誌第六号（二〇〇七年）に掲載されている。南山宗教学文化研究所に置かれた当学会の事務局が過重負担となったこともあり、二〇〇五年の総会で学会解散の話が持ち上がり、それまでの活動の総括がなされることになったのである。それを踏まえて理事会および総会で議論した結果、事務局の業務を軽減し、学会の運営の仕方を改善することで学会を存続することが決まった。

討議された主要テーマ

これまで学術大会で討議されてきたテーマは以下のようなものである。（八木誠一氏「東西宗教交流学会小史」においてこの4項目に分類されていたので、それを踏襲した。基本的に1982～2000年までは八木誠一により、それ以降は発表題目によって分類したが、網羅ではない。特に④は発表題目ではなく、テーマを書き抜いた。）

① 仏教とキリスト教の対話において重要な役を果たした思想家の立場をめぐって

1982～2006年：「滝沢克己」「久松真一」「土井真俊」
「西田幾多郎」「西谷啓治」「阿部正雄」「小野寺功」
C・G・ユング」「上田閑照」

2007～2021年：「ヤン・ヴァン・ブラフト」「田辺元」
「河波昌」「上田閑照」「八木誠一」

② 仏教とキリスト教、宗教間対話

1982～2006年：「イエスと禅」「キリスト教と仏教の接点」「仏教とキリスト教（可逆・不可逆）」「東西霊性交流をめぐって」「仏教からキリスト教へ」「仏

教とキリスト教―行論への展開「マリヤとマザー」
「仏教・キリスト教から見た場所」「タウラーにおける
宗教間対話」

2007～2021年：「仏教・キリスト教からみた《場

所・二重世界内存在》」「キリスト教と仏教における
《絶対の無限の開け》」「宗教間対話における言語の問
題」「宗教間対話と文明間対話」「イエスの言葉／禪
の言葉」「対話への道程」

③ 仏教論

1982～2006年：「原始仏教」「大乘仏教」「禪」「浄土教」
「唯識」

2007年以降：「浄土仏教の世界」

④ 宗教間対話における重要テーマ

1982～2006年：〈コミュニケーション〉〈象徴〉〈場所〉
〈言葉〉〈空の思想〉〈輪廻〉〈神〉〈死〉〈靈性〉〈自然〉
2007～2021年：〈身体〉〈経験〉〈宗教経験〉〈いのち〉
〈絶対無〉〈人格性と非人格性〉〈科学〉〈脳科学〉〈神

秘主義〉〈宗教哲学〉〈信と知〉〈回心〉〈生命〉〈環境〉
〈倫理〉〈宗教と社会〉〈宗教と文学〉

二〇〇六年までの共通理解の確認

第六回大会において、大会のテーマを決める際の共通理
解が確認された。

第一に、発足時の方針として「まず最近の思想家が仏教
とキリスト教の比較、対話などの領域でいかなる仕事をし
たかを確かめよう」ということになった。思想家という「人」
に焦点を当てたのは、異宗教との対話は思想家の主體的な
自己変革を必要とするものであるから、思想だけでなく、
その人の体験や実践まで含めた総体を扱う必要があると考
えられたようである。そこで①のテーマが設定された。
そして、人を基盤として宗教観対話として②のテーマが
設定された。

第二に、本学会の共通の地盤が宗教哲学（西田哲学をひ
とつのモデルとする）であることが確認された。宗教哲学

の立場で、最初は相互の宗教を学び合おうということになり、まず仏教、次にキリスト教を学ぼうということでテーマが選ばれた。それが仏教をテーマとした③であり、次にキリスト教論が続くはずであった。しかし、本学会は「概論的勉強会」というより「宗教哲学的研究討議会」であるという批判が出て、第一二回大会からはこの方向は止めになった。両教に関する一般的知識は会員の前提条件であるという考え方をとる。

そこで、大会のテーマは②と④に重心が置かれることとなった。(なお第三五回大会のテーマ「浄土教の世界」は仏教の勉強のように見えるが、これは前年第三四回大会のテーマ「西田哲学とキリスト教」を受けて、西田哲学の背景にある浄土教を仏教の立場に即して論じようという趣旨のものであった。)二〇〇七年以降は基本的にこの方向が踏襲されている。折に触れて「人」をテーマにしたことがあるが、主としてそれは、本学会を牽引してきた方々と直接に思想的対話を行う機会をもつためであった。

本学会の意義と目的について

本学会は、仏教とキリスト教との宗教哲学的なレベルでの相互理解、相互交流を深めることを目的とする。目的とするだけでなく、その目的を達成するために何が必要かということが盛んに議論されてきた。会誌第六号・第七号からその議論の一端を挙げておく。

八木誠一氏はこう論じている。

本学会は仏教とキリスト教の関係に関するある共通の方向を打ち出すことを課題として担っている。自己批判・相互批判を媒介として、仏教とキリスト教の共通の根を発見し、掘り起こす共同作業に具体的に取り組みべきである。本学会の共通の地盤が西田を一つのモデルとする宗教哲学であるならば、西田の「場所論」がそのための共通の「場」となりうると考える(第六号)。

八木洋一氏はこう論じている。

仏教とキリスト教の対話を通して〈宗教〉としての

「共通の基盤」は何かを明確にし、「宗教の本質」究明に徹したことが本学会の特性である。異宗教間の対話はそれ自体が、「解釈学的主体」による *relativant* な宗教象徴として創造的行為であり、その限りで対話が成り立つ。そしてそのことが「解釈学的主体」の実現を意味し、その主体を介して「宗教の形」の自己変革の道が開かれる。このような対話を含む交流が、〈宗教〉の第一義的な現実性である（第六号）。

氣多雅子はこう論じている。

一般的に宗教間対話の目的とされる①相互理解、②対話を通しての「宗教的真理」の探究、③具体的な問題についての合意形成、のうち、本学会は①と②を目的とする。参加者を会員と承認されたオブザーバーに限定し、議論に長時間を費やすという形態をとることにより、深層レベルの相互理解の追求それ自体が「宗教的真理」の探究となることを示した。本学会の議論は概して、キリスト教と仏教の共通の根源を追究

するという方向に進んだ。その探究の方向が適切かどうかが考察されるべきである（第六号）。

「ヤン・ヴァン・ブラフトの著作における宗教思想」というJ・W・ハイジック氏の発表で取り出されたブラフト氏の考えはこうである。

宗教間対話は、まず思想の対話であり、特定の宗教的伝統をもつて徹底的に形成されてきた世界観をもつ個人と個人との間の話し合いである。種々の宗教的伝統の相違点について「話し尽くす」とともに、キリスト教の西洋における精神史とそれと大いに異なる東洋における精神史との「両方通行の橋」を架けることを、自分の役割と考えている。本学会の活動をその一環とする（第七号）。

（ただしブラフト氏は、対話の基盤となし得ると考えてきた西田幾多郎の思想に根本的な問題があると主張するようになる。）

本学会の問題点について

以上のような本学会の活動を振り返るなかで、問題点が指摘され得る。多くの会員の意見を踏まえて、次のようにまとめることができる。

第一に、本学会での仏教とキリスト教の関係に不均衡があるように見える。キリスト教側に対話への関心が強く、仏教側は受け身の傾向がある。そこから実務の負担もキリスト教側に偏っている。

第二に、現代世界の問題状況では仏教とキリスト教以外の宗教との対話が必要ではないか。たとえばイスラームとの対話である。あるいは、宗教間の対話以上にいま必要なのは宗教者と世俗者間の対話ではないのか。

第三に、現代では宗教間対話そのものの重要性が低くなっているのではないか。現代では、宗教間の対立・抗争よりも宗教内部での対立・分裂の方が深刻になっているように見える。また、宗教の違いが紛争の要因であるように見えても、実質的要因であるのは経済や政治などの問題で

あることが多いように思われる。

第四に、京都学派の宗教哲学を宗教間対話の共通の基盤とするとということが通用しなくなっているのではないか。ポスト形而上学ということが語られるような状況なかでは、宗教哲学について徹底的な検討が必要であるように思われる。

第五に、宗教間対話についての問題意識や京都学派の哲学の捉え方に、世代的な差が生じてきているのではないか。役員の高齢化で、その捉え方の違いが学会の活動に反映されていないのではないか。

第六に、発起人および初期の活動を担った先生方が不在の今日、いまのプログラムの形は不適當ではないか。発表者を限定しないこと、会員の自由発表を増やすことが必要であろう。

けた・まさこ
京都大学名誉教授